

日本海学講座「勝興寺の大修理―施工前と施工後―」

講師：高田 克宏 氏（公益財団法人勝興寺文化財保存・活用事業団 専務理事・学芸員）

日時：2021 年 11 月 6 日（土）14:00～15:30

1. 勝興寺とは

勝興寺は高岡市伏木古国府に建つ寺院で、奈良時代にはこの地に、現在の県庁に当たる越中国府があったと推定されている。なぜ「推定」かというと、今も寺が建っていて発掘調査ができず、証明できないためである。越中国府で大伴家持が政務を執り、224 首の秀歌を詠んだとされている。



勝興寺がこの地に移ってきたのは 1584（天正 12）年のことである。1988（昭和 63）年 1 月には本堂と唐門が重要文化財に指定され、1995（平成 7）年に残り 10 棟が追加指定となったので、勝興寺には現在 12 棟の重要文化財が存在している。

2. 本堂の修理

勝興寺の境内地は大きく本堂と本坊（住居機能）に分けられる。現在の本堂は、1795（寛政 7）年に建てられた。当時の勝興寺 13 世（佐渡国の殊勝誓願興行寺の 5 代の住職を加えると 18 世）住職法暢（ほうちょう）は元々、加賀前田家の十男として生まれ、10 歳のときに住職として入山した。ところが、兄が次々と早世したため、還俗して加賀藩 11 代当主・前田治脩（はるなが）となった。本堂は、その治脩が加賀に戻る際に建てたものである。

勝興寺の修理は 1998（平成 10）年から始まり、本堂は 7 年をかけて修理された。修理前後で決定的に変わったのは、屋根である。修理前は瓦葺だったが、明治以降に改変されていたことが判明し、修理前に瓦を全部下ろし、創建当初の姿を調査した。文化財を修理する場合には必ず調査が行われるが、それによってこけら葺の上に鉛板が葺いてあったことが分かったので、そのように修理された。ただ、鉛からは鉛毒が出るので、協議の結果、鉛に風合いがよく似た亜鉛合金を葺いている。

本堂の柱のほとんどはケヤキ材だが、1 本だけ桜が用いられている。桜はケヤキに比べて柔らかく、持ちが悪い。そのため、桜の柱が傷んできたときを本堂全体の修理時期の目安にしていたと考えられる。実際、修理に取り掛かったとき、桜の柱は畳の上 20cm まで腐っていたが、ケヤキはそこまで腐っていなかった。

桜の柱は、傷んだ箇所を切って、腐っていない部分の下に新しい桜材をつぎ足した。文化財の修理は、1mm でも多くオリジナル部材を残すのが大原則だからである。ただ、時代によって修理法は変わる。国宝に指定されている高岡市の瑞龍寺仏殿も 1938（昭和 13）年に一度修理しているが、そのときは仏殿のケヤキの柱 4 本がそっくり入れ替えられた。替えたケヤキは台湾製といわれているが、オリジナルは能登の山奥から運んできた、成長の遅い上質なケヤキだったため、木目の細かさの違いが一目で分かる。

同様に勝興寺書院の根継も、できるだけオリジナルを残して新しい部材を足す方法で修理している。しかし今は、オリジナルほど目の細かい上質な材木の入手が困難なため、新しいものは木目が粗い。また、柱の幅も新しい柱の方が数ミリずつ大きい。これは、50 年、

100 年たつと木が痩せることを見越して、最終的に同じ太さになるように調整しているからである。

書院の天井も、1mm でも多くオリジナルを残すような修理が行われ、ギザギザの継ぎ目になっているところがある。修理前は建具によって畳の部屋と縁側になっていた場所が、建具のない一続きの部屋だったことが分かったので、天井の一部を切り取って建具を撤去し、空いた部分に新しい天井板を入れた。

本堂の修理を第 1 期工事（1998 年～）とすると、第 2 期工事は 2005（平成 17）年から始まり、本堂以外の 11 棟の工事が行われた。全て終わったのが今年 3 月なので、23 年かかったことになる。本堂の修理だけで 13 億円かかった。修理は、素屋根と呼ばれる覆いをかぶせて行われるが、素屋根をかけるだけでも十数億円かかる。残りの 11 棟や防災設備等を含めると、総事業費は約 70 億円となった。その全額を寺（宗教法人）が負担しているわけではなく、国と県と市から補助金をいただき、残りを宗教法人が負担している。

3. 本坊の修理

本坊（大広間・式台）の屋根は、杉の板を厚さ 3mm にスライスして竹の釘で留めていくこけら葺で、現在その上に鉄板も張っている。ここは見学者が見ることのできない裏側なので、鉄板で養生し、雨でも傷まないようにした。こけら葺は良くて 30～40 年、早ければ二十数年で葺き替え時期が来るので、葺き替えになるべく金がかからないようにしたのだ。

瑞龍寺の場合は、1996（平成 8）年に大修理が完工したが、その 12 年後という短期でこけらの葺き替えが行われた。通常、こけらを葺くときには 50cm 間隔で銅の帯を仕込む。すると、銅から猛毒の緑青（ろくしょう）が出るため、虫が湧かない。しかし、瑞龍寺では銅を仕込まなかった。当時、銅板を仕込むことにこけらを守る効果がないのではないかとされていたこともあり、銅板を入れなかったのだ。その結果、こけらの中に虫が湧き、その虫をカラスがつつくので、穴が開いて雨水が染み、また虫が湧くという繰り返しとなり、わずか 12～13 年でこけらがぼろぼろになって修理する必要が生じた。その教訓を生かし、勝興寺のこけらには銅の帯を仕込んでいく。

4. 各門の修理

唐門は、四脚門という足が四つある門である。修理前は銅板葺だったが、銅板を外して調査すると、銅板葺になったのは明治以降で、それ以前は檜皮葺だったことが分かった。唐門に付いていた棟札によると、元々は京都・西本願寺の隣にある興正寺で 1769（明和 6）年に作られたものであることも分かった。勝興寺に移築されたのは 1893（明治 26）年のことである。檜皮葺は京都・奈良でよく見られるが、北陸地方（福井市以北）ではほとんど存在しない。勝興寺の唐門が唯一の檜皮葺の例といっても過言ではない。北陸ではヒノキを植林する文化があまりなく、植林は杉が多かった。そのため、檜皮葺の建物がなく、伝統的な建造物は杉材を用いるこけら葺が多いといわれている。

唐門は通常、勅使門といって勅使（朝廷の使い）などの高貴な人しか通らない。本願寺にも国宝の唐門があるが、それは本堂の正面ではなく横にあって、唐門を通ると書院に直接行けるようになっている。勝興寺のように本堂の前に唐門があるのは一般的ではない。本堂の前にすると、勅使門なのに門徒が誰でも通ってしまうからである。京都から移築さ

れたとき、勝興寺には書院への門として式台門があったため、本堂の前に持ってきたといわれている。通常、一般人は唐門を通れず、本願寺の場合も普段は扉を閉め、柵までして絶対に通れないようにしてある。

これに対し、総門（入り口の門）は誰でも通っていい。高麗門といって、寺ではなく主に城に使われる形式である。高麗門の鬼瓦には 1864（元治元）年の銘が残っているが、実際には「文久四年三月」と書かれている。この時点で元号は元治に替わっていたので、瓦職人が元号が替わっていることに気付いていなかったのだろう。

総門は、50m ほど先に素屋根を建てて曳家し、その中で修理を行った。総門が寺の入り口にあるままでは、トラックやクレーンが入らないからである。このときもまずは瓦を下ろして、オリジナルがどうだったかを調査した。瓦を下ろすとき、どの位置にどの瓦があったか、全て番付けしている。修理して元に戻すとき、使えない瓦は色合いやサイズも全部そろえて新たに作るが、使えるものはそのまま元の位置に戻す。戻すときに、修理前と寸分変わらない状態で戻すのが文化財修理の原則である。そういう細かな工事をしているので、年月もお金もかかる。総門は元々瓦葺だったので、瓦葺のまま修理した。勝興寺には 12 の重要文化財があるが、屋根の葺材が変わらなかったのは総門だけだった。

高麗門は城郭の門であり、大きな屋根と直角に交わる二つの小さな屋根が付いていることが特徴である。高麗門越しに鼓堂が見えるが、鼓堂は望楼形式の建物で、見ようによっては城の隅櫓にも見える。もしかすると城の隅櫓風の建物と総門を配置することで、入り口だけ城下風に見せたのではないかと想像できる。鼓堂は元々、より奥の宝蔵の位置に建っていた。幕末に総門の屋根を修理する際、鼓堂も手前に持ってきてその跡に宝蔵を建てた。そのときに、こけら葺だった鼓堂を総門と同じ赤い瓦葺に変えた。同じような瓦に変えてコラボレーションを意識したと考えられる。

式台門は、書院に通じる式台（玄関）への門である。本来はこの場所に唐門があるはずだが、現存の門があったので本堂前に唐門を置いたというのは先述のとおりである。修理前は屋根瓦の一部が落ちて非常に傷んだ状態だった。式台門は、薬医門といって、城に使われる形式の門である。薬医門で有名なのは、瑞龍寺の総門だろう。しかし、決定的に違うのは勝興寺の場合、番屋が付いている点である。ここで門を通る人を見張っていたことから、身分のある程度高い人しか通らない門だったことがうかがえる。式台門からは、1705（宝永 2）年の墨書が出ている。

式台門も、痕跡調査の結果、瓦葺からこけら葺に変えている。瓦を全部下ろしたときにこけら材が一切出てこなければ瓦のまま修理していただろう。つまり、こけら葺に変更されたということは、瓦を全て下ろしたときにこけら材が残っていたことになる。文化財の修理は、確固たる証拠がなければ往時の姿に復元はできず、現状のまま修理される。修理の流れとしては、当初の設計書では現行の瓦葺のままで組まれ、工事前の調査でオリジナルが現状と異なると判明すれば、その都度設計変更される。しかし、現場の人間だけで設計変更できるわけではない。必ず文化庁に現状変更の届けを出して、許可を得なければならない。式台門も当初瓦葺の設計だったが、調査でこけら材が出てきたので、文化庁に許可をもらい、設計を組み直した。当然、瓦のまま修理するよりも、こけらで修理する方が費用も時間もかかる。そのため、当初計画では設計額 51 億円だったが 70 億円で膨らみ、工期も 20 年から 23 年に延びた。それだけ文化財の修理は大変なのである。

5. 本堂以外の建造物

経堂は、方形造（宝形造）の建物である。真上から見ると1辺9.1mの正方形なので、方形造という。経堂から出てきた1805（文化2）年の棟札には、地元の名前などが書かれており、地元の人々の寄進で建てられたことが分かる。経堂で面白いのは、浄土真宗の寺でありながら禅宗の様式である点だ。なぜか分からないが、方形造も、火焰宝珠が載っているのも、釣鐘型の火燈窓も、禅宗様式の特徴である。

経堂の中に八角輪蔵が置かれている。高さ約4mの巨大なもので、扉には極彩色で菩薩などの絵が描かれている。普段は内部非公開だが、中を開けると縦9段、横4列の引き出しが8面もあり、その中にお経が詰まっている。チベットのマニ車と同様、1周回すと中のお経を全て読んだのと同じ功德があるといわれている。

鼓堂は先述のとおり、修理前は総門とよく似た赤い瓦葺だった。今回、文化庁とも随分協議し、総門とのコラボレーションを重んじるよりも創建当初の姿に戻そうということで、こけら葺とした。瓦からこけらに変わったことで、屋根の反りが非常にきれいに表現されるようになったので、こけらに戻してよかったと思っている。鼓堂のどこに太鼓があるかという、2階である。2階に置いた方が太鼓の音が通るからなのだろうが、修理前は適当に放置されていた。

そして、かつて鼓堂のあった場所に、今は宝蔵が建っている。宝蔵は幕末の慶応3年に造られた、勝興寺の中では比較的若い建物というわけだ。こちらも修理前は瓦葺だったが、こけら葺に戻している。宝蔵とは、軸や屏風など大事なものが収められている場所だ。それなのに、なぜ瓦葺から燃えやすいこけら葺に変えたのかとよく言われるが、元の形に戻すことにした。

実は、宝蔵の天井部分も全て土で塗り込められている。裕福な農家の蔵も同様に天井が全部塗り込めてあり、屋根は置いてあるだけである（置き屋根）。普通、置き屋根といえは単純な切妻屋根だが、勝興寺の置き屋根は入母屋造であり、全国的に非常に珍しいものである。

御霊屋（ごりょうや）は、中に前田家11代治脩、12代斉広（なりなが）の位牌が安置されている。加賀藩主の位牌は瑞龍寺にも安置されている。瑞龍寺は前田利長公のために建立された菩提寺なので当然だが、勝興寺は前田家藩主を飾るいわれはない。しかし、治脩は10歳のときに勝興寺の住職として入り、還俗時に本堂を直した。斉広も治脩の遺志を継いで多大な援助をしたので、その恩に報いるために位牌が納められている。

御霊屋も瓦葺からこけら葺に変わっている。1812（文化9）年の墨書があることから、その時期に造られたものと分かる。御霊屋には建物を囲むように西廊下が付いているが、これは住職専用の廊下である。廊下は本堂の内陣につながっていて、内陣で参拝した後、この廊下を通して御霊屋や御内仏でも参拝するのが住職の日課だった。

大広間・式台は、外見が大きく変わっている。修理前は、玄関が二つある瓦葺の建物だった。しかし、大広間の玄関は明治以降の増築であることが判明した。普通は式台の玄関から入り、式台の間を歩いて大広間に行くので、大広間に直接入ることはないと考えれば当然である。今回の修理では大広間前の玄関を取り除き、瓦葺からこけら葺に戻した。もう一つの変化は、サッシを入れたことである。当時、サッシがあるわけがないとはいえ、

サッシがないと冬は寒くて何もできない。防犯上の意味もあって、文化庁と相談してサッシを入れた。

玄関（式台）を上がった所が式台の間で、非常に大きな床の間がある。奥にももう一つ部屋があって、全部で5間半の長さがある。修理後は、ここと大広間の壁やふすまに桐や菊の御紋の壁紙が施された。これも、壁を一枚ずつ剥がした最下層から出てきた図柄を壁紙に採用している。調査の結果、もしも紋が一つも出てきていなかったら、真っ白な壁紙が使われていただろう。

大広間の対面所には、上段の間がある。地方の浄土真宗の寺で江戸時代以前に造られた上段の間があるのは勝興寺だけである。曹洞宗の瑞龍寺にも上段の間があり、加賀藩主が座る間として使用された。こちらは勅使が座るための上段の間である。

対面所の障壁画は、修理後も剥げたままになっている。現在の文化財の障壁画修理では、剥落止めは施すが、剥げた箇所には絵を加筆することはしないからだ。欠落箇所は想像で描くしかないのです、そうすると歴史の改ざんにつながってしまう。欠落箇所は、調査機器の発達によって本来の姿が分かるかもしれない後世の人に任せようという考え方だ。

御内仏（おないぶつ）も、修理前は屋根の瓦が乱れて波打っていたが、今はこけら葺に変わった。御内仏は住職一家の仏壇の間のことであり、西廊下を通ると御霊屋に続いて、日課である参拝ができるようになっている。

奥書院も瓦葺からこけら葺に変えた。また、段のあるしころ屋根を再現した。なぜ屋根に段が設けられたかという、江戸時代、大名や寺院の力をそぐために、3間を超える梁を使った建物の建造を禁じた「三間梁規制」が定められたので、3間より大きな建物であることをごまかすため、屋根に段を作り、建物本体とひさし部分が分かれているように見せたのである。

奥書院には金の間と呼ばれる部屋があり、壁とふすまに金箔が貼られている。金箔の傷みがひどくて再利用できなかったところに新たな金箔を貼ったが、他はオリジナルのままである。実は、現代の金箔はほぼ純金だが、昔の金箔は鉛などの不純物が混じっている。しかし、不純物が入っていると金を引き延ばす際に破れやすいため、丁寧な金箔ののし方がされたことを示す証拠にもなっている。そういった不純物が長い年月を経て浮き出てきて、金箔に立体感を与えている。

書院では、先述のとおり、加えられていた建具を取り払って、天井の穴を新しい板で補った。また、耐震補強のためにポリカーボネート板も加えた。文化財の耐震補強は、見た目が不細工になってしまうけれども倒壊するよりはいいということで、例えば台所は鉄骨で梁を抱える形で補強している。台所の修理後は、屋根の勾配が緩くなった。明治時代、棟を上げて門徒が寝泊まりする部屋が造られたので、江戸時代の緩い傾斜の石置き屋根に戻した。

6. 勝興寺の真価

修理後の勝興寺境内を1803（享和3）年の「二十四輩順拝図絵」と比較すると、ほぼ変わっていない。異なるのは、誰でも入れた空間（本堂）と関係者しか入れない空間を分ける塀があったことと、鼓堂の位置が変わって宝蔵が建っていること、唐門がないことである。

勝興寺は、江戸時代に建てられた建物がほぼ残っている。参拝の受付建物とトイレ以外、明治以降に建てられたものはほとんどなく、境内の広さもほぼ変わらない。これは全国的にも珍しい。国宝の瑞龍寺は5万坪の敷地があったが、今は1万坪しかなく、本坊は一切残っていない。勝興寺に来れば、当時の浄土真宗の生活が全て分かる。高岡の国宝・重要文化財として二つの寺はよく比較されるが、こういう観点から私は勝興寺の方が歴史的価値があると思っている。